



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「臨床心理基礎実習」におけるロールプレイと異学年間スーパービジョンの取り組み
Author(s)	上倉, 茉莉; Kamikura, Mari; 朴, 秀寅 他
Citation	臨床心理発達相談室紀要, 5, 71-95
Issue Date	2022-03-18
DOI	https://doi.org/10.14943/RSHSK.5.71
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84512
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_2434-7639_5_71-95.pdf



「臨床心理基礎実習」におけるロールプレイと 異学年間スーパービジョンの取り組み

上倉 茉莉*・朴 秀寅*・辻脇 野乃花*・土井 菜穂*
本田 鈴奈*・大西 春香*・高橋 芙悠*・田中 佑典*
寺田 拓晃*・本間 慧子*・井出 智博**

A Practical Report on Role-play and Supervision in the “Basic Practice of
Clinical Psychology” at the Graduate School of Clinical Psychologist

Mari KAMIKURA, Sooin PARK, Nonoka TSUJIWAKI, Nao DOI,
Suzuna HONDA, Haruka ONISHI, Fuyu TAKAHASHI, Yusuke TANAKA,
Hiroaki TERADA, Keiko HONMA, Tomohiro IDE

要旨

本稿では公認心理師、臨床心理士養成課程の大学院において開講された「臨床心理基礎実習」におけるロールプレイや異学年間のスーパービジョンによる体験的学習の取り組みをもとに、その意義と課題を検討した。「臨床心理基礎実習」は大学院における公認心理師、臨床心理士養成の入口に配置された科目であり、受講者は心理臨床の基礎を学び、その後、学内外における心理実習に取り組むことになる。今年度はCOVID-19の感染拡大の影響を受け、学内外の実習が実施できなかったため、修士課程2年次に在籍する院生の代替実習として異学年間スーパービジョンもこの授業の一部に組み入れる必要があった。一部オンラインで行われたロールプレイやスーパービジョンについて受講者の体験を整理し、「臨床心理基礎実習」においてロールプレイやスーパービジョンに取り組む意義と課題を整理した。

キーワード：臨床心理基礎実習 ロールプレイ スーパービジョン COVID-19

Key words : Psychotherapy Training, Role-play, Supervision, COVID-19

I 問題と目的

1. 「臨床心理基礎実習」について

「臨床心理基礎実習」は臨床心理士養成課程大学院（以下、養成校）において必修科目として設定された科目であり、附属相談室でのケース担当や学内外での実習など、その後の心理臨床家

* 北海道大学大学院臨床心理学講座修士課程

** 北海道大学大学院教育学研究院准教授

としての実践の基礎について実習を通して学ぶ機会である。公開されている臨床心理士養成校の「臨床心理基礎実習」のシラバスを概観すると心理面接の構造、倫理、相談申し込みの電話対応、受理面接での対応、記録の書き方、傾聴の基礎などに関する内容が含まれており、講義形式や事例検討の他にロールプレイ（以下、RP）などを用いた実習形式で授業が進められることが示されている。

本学でも「臨床心理基礎実習」においてRPを用いた実習を取り入れた授業を行うことを計画した。しかし昨年度（2020年度）に引き続き、COVID-19の感染拡大によって対面での開講が困難な時期があったために実習を取り入れた授業の展開においては授業者だけではなく、受講者である大学院生にも様々な工夫が求められた。また、「臨床心理基礎実習」に続く学内外での実習の実施が困難になり、「臨床心理基礎実習」の対象である修士課程1年（以下、M1）に加え、修士課程2年（以下、M2）の実習代替措置を兼ねた実習とする必要も生じた。こうした試行錯誤は単に感染拡大下の一時的な措置としての意味だけではなく、ポストコロナの時代にも活かすことができる知見を含んでいると考えられるため、本報告では今年度（2021年度）の「臨床心理基礎実習」、特にRPを用いた実習と取り入れた授業の展開、および実習代替措置を兼ねた異学年間のスーパービジョン（以下、SV）体験について、RPやSVの主体である大学院生の立場に加え、授業者である教員の立場からその体験を整理し、意義と課題を検討したい。

II 「臨床心理基礎実習」の授業内容と方法

1. 「臨床心理基礎実習」の構成と感染拡大に伴う実習代替措置についての概要

本学における「臨床心理基礎実習」は（1）箱庭療法などを通して臨床の現場や当事者世界への想像力を養う、（2）RPや試行カウンセリングを通して心理面接の実際を学ぶ、（3）附属相談室のインテークカンファレンスへの出席や面接への陪席などを通して臨床現場の実際に触れるという3つのパートから構成されており、本稿で取り上げるのは『（2）RPや試行カウンセリングを通して心理面接の実際を学ぶ』というパートについてである。時間割上は10週にわたって毎週1コマ（90分）が設定されており、本年度も『（1）箱庭療法などを通して臨床の現場や当事者世界への想像力を養う』のパートが終了する6月から開講された。授業計画の概要は表1の通りである。6月当初は感染拡大が続いており、本学が所在する北海道（札幌市）では5月16日に発令された非常事態宣言が6月1日に延長され継続していた。その後、6月21日には緊急事態宣言は解除され、まん延防止重点措置に移行された。7月11日に一時的にまん延防止重点措置は

表1 授業計画の概要

回	日にち	実施形態	内容
1	6/1	ワライ	オリエンテーション、面接を行う上での心得
2	6/8	ワライ	電話受付とインテーク面接1
3	6/8	ワライ	電話受付とインテーク面接2
4	6/15	ワライ	ロールプレイ（RP）の説明、RP1回目
5	6/29	対面	RP・SV1回目のシェア+RP2回目
6	7/13	対面	RP・SV2回目のシェア+RP3回目
7	7/27	対面	RP・SV3回目のシェア、授業のまとめ
8-10	時間外		記録作成・SVの時間、紀要レポート作成

解除されたが、札幌市では拡大防止特別対策が取られていた中で、7月31日には8月2日から再びまん延防止重点措置が実施されるといった経過をたどっていた。

授業の形態は緊急事態宣言、まん延防止重点措置の実施、解除に伴って示される大学の行動指針のレベル（以下、BCPレベル）に基づいて決定され、6月21日までは原則オンラインでの授業実施を定めたレベル3の状態にあり、その後は対策が十分であると判断される授業については対面での実施が認められるレベル2の状態となった。したがって表1に示したように授業の前半部分はオンラインで開講し、後半部分は対面で開講することとなった。

一方、M2が対象となる本学教育学研究院附属臨床心理発達相談室（以下、相談室）での心理面接の実習や学外の実習機関での実習など、学内外における実習は上記のような感染拡大の状況を受け、その実施が困難な状況が続いていた。こうした感染拡大に伴う実習への対応については、文部科学省、厚生労働省の各部署が連名で『新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について』（令和2年2月28日）を發出し、年度をまたいだ実習の実施や演習や学内実習の実施による代替となっても差し支えない旨の通知を行っている。M2が対象となる実習であるために年度をまたぐ形で実習日程を先送りする対応は現実的ではないため、本学では教員内で検討を重ねいくつかの演習や学内実習の実施による実習代替措置を講じることとした。そのひとつが「臨床心理基礎実習」で実施するRPにおいてカウンセラー（以下、Co.）役を務めたM1のSVにおけるスーパーバイザー（以下、SVor）となるというものであった。本報告では「臨床心理基礎実習」におけるRP体験を中心に扱うが、以上のように並行して行われた実習代替措置の側面についても併せて報告し、意義と課題を検討することとした。なお、SVの概要については後述する。

2. ロールプレイ実施に至るまで

先述のように6月当初はオンラインでの開講が求められたためにweb会議ツールZoomを用いて授業を実施した。内部進学者だけでなく他大学からの進学者も多かったが、『(2) RPや試行カウンセリングを通して心理面接の実際を学ぶ』のパートに先立って開講された『(1) 箱庭療法などを通して臨床の現場や当事者世界への想像力を養う』のパートは1回を除いて対面で開講ができたために受講者同士は多少関係を構築した状態で授業に臨んでいたものと思われる。また、感染拡大も2年目に入り、授業者も受講者もオンラインによる授業にはずいぶん慣れを感じていた点も感染拡大1年目とは状況が異なっていた。

第1回目から3回目の授業では講義形式で心理面接における倫理、枠組みに関して心理面接のプロセスを示しながら治療構造や治療契約について説明を説明し、『臨床心理士倫理要綱』をもとにして臨床心理士に求められる倫理事項についての確認を行った。また、電話での面接受理についてのRPではあらかじめ授業者が準備した5つの架空の事例を各受講者にひとつずつ事前に配布し、クライアント（以下、Cl.）役としてその事例のCl.になったつもりで相談受付先に架電するという課題を設定すると共に、Co.役としてその電話に対して電話受付シートを用いて必要情報を把握し、受理面接につなげるという課題を設定し、それぞれがCl.役とCo.役を1回ずつ経験するようにZoom上でRPを実施した。

3. 面接のRPについて

上記のような経緯を経て、4~9回の授業において面接場面のRPに取り組んだ。授業者はあらかじめ人数分のRPのシナリオを準備、配布したうえで各シナリオについて受講者をCo. 役とCl. 役に1名ずつ配分した。この時Co. 役とCl. 役が入れ替わった時に同じ組み合わせにならないように留意して配分した。

RP 1回目については、まん延防止重点措置が継続しており、大学のBCPレベルでは対面での授業実施が認められていなかったためZoomを用いたRPとなった。しかし、それ以降は対面での授業実施が可能な状況となったために大学で対面による授業を実施し、RPはそれぞれに個別の空間（相談室）を使用して行うことになった。またRPの際、Co. 役の受講者にはその内容をICレコーダー等で録音してもらい、後に逐語記録を作成することを求めた。記録作成後には後述する実習代替措置を兼ねたM2とのSVの時間が設けられることを考慮し、各回の授業は2週間隔で実施することとした。RP2、3回目の授業では冒頭に前回のRPとSVの体験を振り返り、受講者内でシェアする時間を設けた後、RPを実施した。RP2回目とRP3回目とその間の流れを表2に例示した。

表2 RPとSVの流れ（例）

6/29 (RP2)	6/29~7/13 (SV2)	7/13 (RP3)
<p>【授業時間内】 《RP1, SV1の振り返り》</p> <p>《RP2回目》 ・ 枠1, 枠2, 枠3 →各25分ずつ * 授業前にシナリオを読み込んでおくこと * 受講者は枠1~3のいずれかの回でCo. 役とCl. 役を務める * Co. 役はRP後、逐語記録を作成する</p>	<p>【授業時間外】 逐語記録を作成したうえでSVを受ける</p>	<p>【授業時間内】 《RP2, SV2の振り返り》</p> <p>《RP3回目》 ・ 枠1, 枠2, 枠3 →各25分ずつ * 授業前にシナリオを読み込んでおくこと * 受講者は枠1~3のいずれかの回でCo. 役とCl. 役を務める * Co. 役はRP後、逐語記録を作成する</p>

4. 実習代替措置としてのスーパーバイザー体験について

実習代替措置としてのSVor体験の対象となったM2は修了年度にあるために感染拡大が長引いた場合、従来の学内外での実習を実施することを待っていると実習時間を確保することが困難であることが予測されたために年度初めの段階でいくつかの実習代替措置が検討され、そのひとつとして設定されたのがここまで示してきたような「臨床心理基礎実習」においてRPに取り組むM1に対するSVのSVor体験という代替措置であった。しかし、M2がM1の年度当初から感染が拡大し、彼ら自身が十分な臨床経験を持っていないままにM2の学年を迎えている状況でもあった。野島（2014）はSVとはスーパーバイザー（以下、SVee）の意欲の向上と能力の向上を目的としたものであるとしているが、本稿におけるSVの取り組みでは経験豊富な臨床家がSVorとなり、SVを実施するというよりも、同じような経験をしている仲間同士で語り合ったり、

研修したりするピアビジョン（井出，2013）と表現した方がその実態をより良く表しているかもしれない。しかし、この実習代替措置ではSVorを務めることによってSVの重要性を意識してもらい、大学院修了後にも各自がSVの機会を確保することにつなげたいという目的があったためにSVという表現を用いて実施することとした。なお、実習代替措置は10時間分の実習を代替するものとして位置づけ、SVが持つ臨床的、トレーニング的な意味合いを理解するための講義、SVorの体験、その経験についてのレポート作成、レポートに基づくグループでの振り返りから構成されるプログラムとした。

Ⅲ ロールプレイとスーパービジョン体験について

ここでは、「臨床心理基礎実習」の授業の一環としてRPに取り組んだM1の体験と、実習の代替措置としてSVor体験を行ったM2の体験を、それぞれが作成したレポートをもとにして振り返りたい。このレポートはM1については授業内で課したそれぞれの体験を振り返りながら体験や課題の整理を行うレポートをもとに加筆、修正したものである。M2については実習記録を代替するものとして課された記録に加筆、修正したものである。

1. ロールプレイとスーパーバイザーとしての体験について

(1) カウンセラー役として

1) 上倉

Co. 役としてRPを実施する中で、沈黙の扱いについて難しさを感じた。自分の質問に対してCl. が沈黙しているときは、自分が何か困ることを言ってしまったのではないかという不安や、Cl. が沈黙している状況でこのまま待つべきかどうかと悩む気持ちはあるものの、おそらく内省をしているのだろうと考えて比較的待つことができた。しかし、自分が質問をしてCl. が話してくれた後の沈黙については緊張や焦りが生じた。その理由としてはCl. が話してくれたことに対してすぐに自分が返事をして質問を重ねなくてはならないと感じてしまったためだと考えている。実際には数秒なのだが、「どのように返答をしようか」「いまのCl. の話から何を聞いたらさらに広がっていくだろうか」と考えている間に沈黙が伸びていく感覚がしてさらに焦りが募っていった。RP体験をシェアする時間に、沈黙についても話題にしたらよいのではないかという話を聞いて、自分の一言がCl. に良くも悪くも影響を与えてしまうという意識が強すぎたのではないかということに気付いた。カウンセリングにおける会話ではCo. がリードしなければならないかのように思っていたが、カウンセリングはCl. とCo. の両方で作っていくものである。Co. が常に完璧でいられることなく、またその必要もないのではないかと考えた。例えばCl. に対してうまく応答することができなかつたと感じて、自分の発言に対するCl. の反応をしっかり見ることで自分の発言に対してどう感じたのかを確認でき、フォローすることも可能となる。Cl. の反応を敏感に感じ取れるよう観察眼を養う必要があると思った。

また、カウンセリングの終わり方についても考えた。今回、自分自身がカウンセリングの方向性がかめないうまのRPになってしまったと感じている。毎回Cl. から話を聞きながら模索していると時間になってしまっていた。途中で、「あ、時間なので終わりです」ではなく、あと数分というところでCl. と一緒に今回のカウンセリングの振り返りをするべきだったと反省している。カウンセリングの導入部分だけでなく終了時にどのような話をして終わるか、という

ところはCl.にとってその回の印象として強く残るだろうし、次回のカウンセリングへのモチベーションにも繋がってくると考えられるため慎重に行いたいところである。

オンラインでのカウンセリングと対面でのカウンセリングの両方を体験したことで気付いたことがあった。初回はオンラインだったが2回目以降は対面で行った。Zoomでレコーディングすると画面も録画されるため、文字起こしの時に表情も再生されることで会話とノンバーバルな部分もあとから確認できるところはオンラインで行うメリットだと感じた。ただ、同時に話すことができないことや常に目が合わない感覚があり話しにくさがあった。それと比較すると、対面で行った際には後で文字起こしする際には音声のみとなったが、RP上では相手の表情も見やすく、室内の静かさやその場での雰囲気を感じやすく、話しやすいと思った。

2) 朴

1回目のRPは初めてのRPで、ケースの基本情報に基づいてCo.として臨んだが、一番難しかったことは面接の取り組みだった。最初の面接でCl.にどのように声をかけるのか、またどのように質問したら良いか、どのように話を進めていけば良いか、などが心配だった。また面接中で沈黙があるとき、その沈黙に耐えられなくて、私の方から話を続けていこうとしたことを感じた。先生からも聞いたように、記録をするとき、取り調べのように質問ばかりしていたことに気づいた。そのことから客観的な質問だけをではなく、Cl.の話を聞く必要があることを感じた。

2回目のRPでは、前回のように質問ばかりするのではなく、Cl.の話を聞きながら質問していくことができ、少し良くなったと感じられた。しかし、20分のRPが終わってから気づいたことは、面接に入るときには挨拶から始まったが、時間内に仕上げまでにはできなかったことだった。授業を通して学んだことには、カウンセリングはできるだけ決まった時間内にする、延長はなるべくしないことなどがあった。そのため、カウンセリングを行うときには、時間を確認しながら終わるあたりにそれを知らせて、仕上げまで十分にできるようにする必要があることを感じた。

3回目のRPでは、9回目の面接という設定で、Cl.からアドバイスを望んできたので、Co.としてアドバイスをする形でRPに取り組んだ。できるだけCl.の話を聞き、Cl.の立場から考えようとしながら自分なりに意見を話したが、結局私の意見を言うことは客観的ではなく主観的なことになるので、自分の意見を話しても良いのか心配だった。そのようにCl.からアドバイスを望んできたときに、Co.としてどこまでアドバイスしてもよいのか、私の意見をCl.がどのように受け取るのかについて不安が生じた。

全体のRPを通して、Cl.の客観的事実を考えた上で主観的事実を聞くためには、カウンセリングの時Cl.が心地よく話ができるような環境を作る必要がある、またCo.として信頼感を与える必要があると考えられた。またRPを行いながら気づいたことは、Cl.について1回だけで分かることは難しいので、面接を行うたびに理解しながら話を聞いたり質問したりすることが重要だと学ぶことができた。今後は、もっとCl.の立場から考えてみる練習すること、Cl.の性格などを考慮しながらカウンセリングを進める対話術を勉強する必要があると感じた。

3) 辻脇

Co. 役を体験する中で感じた難しさは、カウンセリングの間自分の言動でCl. を不快な気分になさせていないか常に不安になってしまい、本人の話や気持ちを集中して捉えることができなかったということである。カウンセリングを受けるCl. は様々な問題を抱えており、Co. の言葉ひとつでさらに彼らを傷つけてしまう恐れがある。特に今回のCl. は過去に自傷行為の経験があったため、カウンセリングでの関わり方が原因となつてさらなる自傷行為につながるのではないかと不安があった。そのような不安からRPではとにかくCl. を不快な気分になさせないよう質問の表現やCl. の話に対してどのように反応したらいいかということばかり考えていた。そのため肝心のCl. の気持ちや考えに焦点をあてて話をきくことができず、Cl. のありのままの心理状態を理解することができていなかった。振り返ってみると、確かにCl. を不必要に不快な気分になさせるような話し方やふるまいはしないよう配慮すべきであるが、何がCl. にとって不快な気分になさせるのかCo. が一人で考えていても完璧には分からない。もしかすると、私がCl. に聞くかどうか悩んだ質問は本人からすると不快な質問ではなく、むしろ自分の問題について何か気づききっかけになった質問だったかもしれない。そのため自分の基準だけでCl. を不快になさせないようにしようとするのではなく、カウンセリングの中で直接Cl. に「今の質問で嫌な気分になさせてしまいましたか?」「私の言葉で嫌な気分になってしまった時は教えてください」など伝えることで、今以上にCl. の話に集中することができ、より建設的な方向にカウンセリングが進むと考えた。

4) 本田

RPでCo. 役を経験して、相手の発言に対する相槌や返す言葉のレパートリーの少なさを実感した。「そうなのですね」の後に続く言葉が出てこず、居心地の悪い沈黙が流れてしまい相手に申し訳なさを感じた。聞きたい内容があっても傷つけてしまったり負担になつたりしないかどうか気がなり、なかなか聞き出せないところに難しさを感じた。マイナスにとらえられるような表現にならないように常に気を張っているのが大変だった。今後は、イエス・ノーでこたえられる質問のほかに、相手の気持ちを引き出せて話しやすくするような質問の仕方ができるようになっていく必要があることが分かった。また、沈黙が出たときにそれが必要な沈黙かどうかを判断できるスキルを身につけなければならないことも分かった。そのスキルがあれば沈黙が流れても変に焦らず、どっしりと構えていられるのだろうなと感じた。

5) 土井

RPにおけるCo. の体験を通して、カウンセリングの始め方に難しさを感じた。特に、1回目のRPでは、どのようなことから話し始めたら良いか戸惑ってしまい、やや不自然な始まり方をしたように思う。2回目、3回目のRPでは、前回話したことを振り返ったり今の調子をうかがったりするところから始めることで、自然に本題へと移ることができたように感じた。各回においてどのような始まり方をするのが良いのか考える必要があると思った。

また、沈黙した場面における対応についても難しさを感じた。RPを行う中で、沈黙に耐えられず、何か話さなければならないという焦りの気持ちが出ることもあった。その焦りの気持ちから、必要以上に質問をすることも多かった。RPでの経験も踏まえて、沈黙の扱いについて

考えていく必要があると感じた。

(2) クライアント役として

1) 上倉

自分自身、カウンセリングを受けたことがなかったため、RPを通してカウンセリングとして話を聞いてもらうという感覚のイメージが少しできた。一方でCl.の視点から想像するのは難しかった。実際に経験したことのないことについてどのように感じているか、どんなところがつらいのか、ということ想像するのが難しいと感じた。しかし、実際の場面では自分が経験したことのないことについてつらさを感じているCl.と関わることの方が多い。そのような中で、Cl.の話を聞いて理解しようとする姿勢を作り、Cl.像を考えていく上で想像を膨らませる練習になったと思う。今回、Cl.像をイメージするためにリストカットについて調べたり、どんないじめを受けたのか想像したり、家族との関係や家で何をしているか具体的に想像してそれに対するCl.の気持ちを自分なりに固めてからRPに臨んだ。その中で、「誰にも話したことのないことを初めてCo.に話す」というRP設定があったが、自分の実体験ではないのにも関わらず、言い出しにくさを感じた。他の人の感想にもあったが、RPでも言い出しにくいと感じたのだから、本人であればさらに言い出しにくいだろう。この言い出しにくさはどのような気持ちから来るのか考えたが、自分がRPで感じたのは、受け止めてもらえるかどうか、否定せずにきちんと聞いてくれるかどうかという不安だった。実際にRP中、自分が言い淀む場面があったのだが、Co.役の人が話を聞いてくれようとする姿勢に対して嬉しく感じた。何か話さなくてはいけないと思ってしまうと焦りが募ってしまうため、「無理して言わなくてもいいんだよ」というような声掛けをしてくれて、自分にとってはただ静かに待たれるよりも安心感があった。今回、自分がCl.役をやったときはCo.から声を掛けてもらったことで話すタイミングをつかめたため声掛けをありがたいと思ったが、人によっては静かに待っていた方がその人にとって内省する時間となりうるかもしれない。前述した沈黙の扱いにも関わってくると考えられるが、Cl.が言い出しにくそうにしているときの沈黙時等、どのように関わっていくかはCl.によって合わせる必要があると思った。Cl.によるそうした個別性に対応していく部分は難しそうだと感じた。

2) 朴

今回私がCl.役として担当したケースでは、比較的軽い感じの悩みとカウンセリングに対する好奇心が主だったので一般的に話をすることにはあまり困難はなかった。しかし、RPを通してCl.もただカウンセリングに行っているのではなく、自分の悩みについて、またどのように話すかについて考えた上で行くことに気づいた。特にCo.にどこまで話せばよいのか、すべてそのまま話すべきかなどについてCl.の中で内的な葛藤が起こることを感じた。RPをしながらカウンセリングに入る前に、私はどんな言葉を選べたら思い通りに話を伝えることができるのかなどを考えた。Co.役をした時と同じように、Cl.も流暢ではなくても自分の中にある話を出すためには、自分なりに悩んで言葉を考える時間が必ず必要だと思われた。

RPをしながら以前にも増して思うようになったことのひとつは、実際にカウンセリングをするとき、Co.をどこまで信頼することができるのかということだった。それを考えると

Cl.だと自分の問題・悩み以外にも気になる部分が多くなると思われた。特に重い悩みを抱えているCl.の場合、自分自身がカウンセリングを受けると決めたとしても実際にCo.の前でそれを話すことは難しいと考えられた。

3) 辻脇

Cl. 役の体験を通して、Cl. がカウンセリングやCo. に対して抱く気持ちを体験することができた。その気持ちとは「話を聞いてもらえる安心感」と「話すことへの不安」である。

「話を聞いてもらえる安心感」とは、このCo. は自分の話をちゃんと聞いてくれる、このCo. なら自分の悩みについて話すことができるといった安心感である。初回面接で私は一刻も早く自分が抱える問題を解消しようとして、Co. に勢いよく悩みを話してしまう場面があった。しかし、そのような場面でもCo. は嫌な顔をせず頷きながら話を傾聴してくれたため、Cl. 役の私は「私の話をちゃんと聞いてもらえる」「このCo. なら一緒に問題について考えてくれる」といった安心感を抱いた。Cl. の中には自分の悩みを誰にも相談できなかつたり、理解してもらえなかつたりする方もいるため、おそらくその場で悩みが解消できていなくても話を聞いてもらえるだけで安心できるのではないかと感じた。

その一方で、カウンセリングの中で「話すことへの不安」を感じた場面もある。それはCo. に話そうと思っていたことが話しづらい内容だったときだ。一度Co. に話そうと決めたことでも、いざ口に出して話そうとすると強い抵抗感を抱くことがあった。なぜならそのことを言葉にして話すことで、Co. が否定的な反応を示したり、自分自身が落ち込んだりするのではないかと不安になってしまうからだ。今回はRPなので私自身の悩みではなかったが、それでも話しづらいということは、実際のCl. の場合はより話しづらいと感じるのではないかと考えた。

以上のようにRPでCl. 役の体験をすることで、Cl. が抱く気持ちを実際に体験することができた。この体験を参考にしながら、今後Co. としてCl. の気持ちに寄り添った関わり方をしていきたい。

4) 本田

Cl. 役を経験して、自分のこと（自分の抱えている悩み）ではないのに言いにくいなと思うことがあったため、当事者の方々はもっと話しにくさがあるのだろうなと感じた。また、Co. に気を使われている雰囲気は意外と感じ取ることができ、困らせてしまったなという感覚も伝わってきた。会話の流れというのは非常に大切に、話したいことがまだあったのに会話の流れが変わってしまい、話しにくくなってしまふことがあった。反対に、流れのおかげで話しにくいことがスッと話すことができるようになることもあった。ゆっくり聞いてもらっているだけでほっとする感覚があり、カウンセリングの力のすごさを知ることができた。

5) 土井

RPにおけるCl. の体験を通して、Cl. として話すことの難しさを感じた。今回、役として体験したCl. は、たくさん話すような性格ではなかったため、話し出すタイミングが特に難しかった。また、RPの各回ではCl. が重要だと思っているトピックがあり、どのように話を切り出すかについて迷うこともあった。このような難しさは、実際のカウンセリング場面でもCl. は感じて

いるのではないかと思った。上に示したような重要な話を切り出すことについて、実際のカウンセリング場面においても、Cl.は様々な感情や考えを持ちながら話していると考えられる。

(3) 記録作成とスーパーバイザーの体験を通して

1) 上倉

記録作成の際、録音したものを聞き直す機会となったが、毎回「何故ここで深掘りしていかなかったのか」や「ここは詳しく聞くとところだっただろう」というように、そのときに聞けていたらもっとCl.とのやりとりに繋がったり、そこからの広がりがあったりしたかもしれないと思うようなことがあった。振り返る時間があることで客観的になれたため、記録作成を通して自分の中でも新しい視点を得ることができた。

SVを受けていると第三者視点からの意見をもらえるため、自分では気づけなかった視点からCl.のイメージを膨らますことができた。それによって、次回はどういうところに意識して応答しようか考えるきっかけとなった。たとえばCl.から質問の嵐にあったとき、どうしてそのような質問が出てきたのかを考えることも先を見る糸口になることに気付いた。授業の中で遅刻してくるCl.の話があったが、それと同じようにすべての行動には意味があると考えて、そこからもCl.について知っていくことができるのだと学んだ。

2) 朴

RPの後、記録作成をしながらCo.として自分が話したことを考える時間ができた。RPの時には私なりに良い感じで話したと感じたことについて、もっとこのように話せば良かったとか、本当にこれでも良かったのかなどを考えることができた。また上手くできなかった部分や変な日本語だと感じた部分については、もっとスムーズに話ができるやり方はないかなどを考える時間にもなった。このようにCl.の話を振り返ることもできるし、また自覚できなかった部分についても考えることもできるので、カウンセリング後の自己記録は本当に重要なパートだと思われる。

記録作成後のSVでは、私が気づいたこと、反省すること、疑問になることなどについて話しながら、もう一度自分自身から考える時間にもなった。またM2の先輩が私の話を聞き、自分の経験を話してくれたり、私が話したことから感じたことや不安になった部分についてどのように思ったなどを話してくれたりしたので、次のRPではどのようにしたら良いのか考えることができた。今回のSVの相手になってくれたM2の先輩は、私のやり方からどの部分が良かったかについて話してくれて、少しずつ自信をもって取り組むことができた。Co.は、人によってカウンセリングのやり方が異なると思う。私はSVを通して私なりのカウンセリングのやり方を考えながら勉強していく必要があると感じた。

3) 辻脇

逐語録を作成することでカウンセリングの内容を客観的に評価することができ、Cl.の発言や沈黙からCl.がどのようなことを思っているかを冷静に考えることができたり、Co.としての自分の関わりが適切であったかを考えたりすることができた。私はカウンセリング中どうしても緊張してしまい、Cl.の言語反応を聞き逃してしまったり、Cl.からの質問に対して回りくどい

返答をしてしまったりすることがあった。そこで逐語録を通してカウンセリングの内容を確認することで、聞き逃したCl.の言語反応を含めてCl.の気持ちや考えについて深く推測したり、またCl.の質問に対してどのような返答が適切であったかを冷静に考えたりすることができた。このように逐語録は建設的なカウンセリングを行うための大事なツールとなる。しかし一方で、逐語録の作成は時間がかかる作業であるため、ケースを何件も抱えるようになると逐語録の作成に多くの時間を取られてしまう。そのため逐語録に常に頼るのではなく、逐語録がなくてもカウンセリングの内容を把握できるようにこれから経験を重ねる必要があると考えた。

また、Co.としての経験が全くない私にとって、SVはカウンセリングに関する不安や悩みを唯一相談できる場所であり、精神的な支えであった。私は今回のRPで初めてカウンセリングを体験したため、カウンセリングがどのような流れで行われるのかが全く分からず、「こういう時はどうしたらいいのか」「これで本当に大丈夫なのか」と不安に思う場面があった。しかしSVの中でそのような不安や悩みを聞いてもらえることで、それが安心感につながり、リラックスして次のカウンセリングを行うことができた。SVにはCo.の自己研鑽につながるといった面もあるが、今回のRPを通してCo.の大きな精神的サポートにもなると実感した。

4) 本田

SVを受けて自分の視点にはない意見をもらえることがとても参考になった。また、自分のRPはなぜ行き詰ったのか、どこがうまくいっていないのかがより明確に見えるようになったのでSVの大切さを知ることができた。今回SVを担当していただいたのが身近な先輩だったからこそ話しやすかったが、仕事を始めてからのSVは自分で話を聞いてもらいたい人を見つけなければならないので、人を見極める能力が必要になってくるのだなと感じた。また、仕事をしながらSVを受けていけないといけないため、相手の都合と自分の隙間時間をうまくすり合わせなければならないなど、スケジュール管理の大切さも再認識できた。

5) 土井

RPの後の記録作成を通して、RP中にできなかったことやわからなかったことに気づき、その改善点について考えることができた。例えば、ひとつの話題についてもう少し深く掘り下げて話してもらっても良いような場面があった。このときのことを振り返ってみると、どのように深く聞いていけば良いかわからなかったように思える。記録を作成しながら、質問のしかたを工夫してCl.の話を広げていければよかったように感じた。

また、RP後のSVを通して、自分とは異なる視点からアドバイスをいただき、RP中や記録作成中には気づけなかったことに気づくことができた。自分に足りていなかった知識やカウンセリングの技術的な部分についてアドバイスをいただいたことで、次のRPに活かすことができたということが良かった点として挙げられる。さらに、SVorの先輩と話していくなかで、RP中にできていなかったことに気づくことができた。具体的には、Cl.の話すことに注意が向くことが多く、非言語的な情報にあまり注目できていなかった。客観的な視点からRPについて考えることができ、次のRPで改善する点や意識する点について考えをまとめることができた。

2. スーパーバイザーとしての体験について (M2の体験記)

(1) 高橋

最初に、SVor-SVeeというよりピアサポートのような関係になるという話をした印象が強すぎて、全体的にピア的な関わりをしてしまった。その方が良いのかと思ってやっていたので、振り返りを通じてSVorとして関わった方が良かったらしいと知り衝撃をうけた。特に最終回は、「また話そうね」と現実的な関係を重視したクロージングで、求められていたものとは違ったかもしれない。

また、振り返りでは「指導的になってしまったのではないか」という話が出ていた。私もとても気にしていた部分で、実際SVの中でSVeeに聞いた場面もありました。しかし、SVorとSVeeという関係性は完全にフラットであるとはもちろん言えず、直球で聞いてもあまり意味がなかったのではないかと、むしろ本音を言いにくくしてしまったのではないかとも思った。実際にSVeeに聞いたという人は他にいなかったようなので振り返りで直接話題に上がることはなかったが、今振り返ると、皆の見解を聞いてみたいとも思う。私自身としては、1番最初にもっと事務的にやるべきだったと感じている。

今回のSV体験では、自分の1年間での変化を感じたところが1番驚いたポイントだった。振り返りであがった沈黙の処理のことも、1年前はあんなに恐れていたのに今ではあまり何も思わなかったり、SVeeが困ったこととして話してくれたことについて、「私だったらこう言うかな」がすぐ思いついたり、そういった変化は今回の実習がなければ気が付けなかったと感じる。その変化(成長なのか?)において、「こういう時あの人なら何と言うだろうか」のレポーターが増えた、というのもすごく大きな要素な気がしている。様々な場面で色々な人のレポーターをインプットすることで、自分が選びたいアウトプットを考えられていると感じる。このような自分の応答プロセスを客観的に感じる事ができたのもこの実習で得られたことであつた。また、その意味では今回、M1の方に「私ならこう言うかな」を伝えられたのは良かった面もあるかもしれないと感じる。

(2) 大西

M1とはほとんど接点がない中で、ほぼ初対面がオンラインのSVの場だったのでお互い探り合いという形で始まった。また、相手はCl.ではなく、Co.の立場なので、普段のCl.とのカウンセリングともまた違う雰囲気であつた。M1も初めてのカウンセリング体験であつたし、自分も初めてのSV体験だったので、どうしたらいいのだろうという空気も流れていた。3回を通して、SVorの役も難しいということを改めて感じた。しかし、3回という中でも、M1のSVeeがだんだんと自信をつけているようなところが垣間見えたので、成長を見守ることができてよかった。

SVでは、はじめ具体的な悩みが語られたので、それに対して指導的になってしまっている部分があつた。しかし、アドバイスよりも面接の場でどのようなことを感じたのか、どんなことを思ってきたのか…という気持ちに焦点を当てるように後半はシフトチェンジしていった。悩んでいる姿を見ると答えを与えてしまいそうになるが、あくまでも焦点を当てるのはCo.とCl.の関係におけることなので、侵襲的にならないように気を付ける必要があると感じた。また、振り返りの場でも、アドバイスを与えてしまいがちになることが語られていたので、何とかし

てM1のために役に立ちたいという先輩という立場としての気持ちもあったのではないかと思う。先輩と後輩という関係あるうえでのSVだったので、切り替えが難しい部分もあった。

また、語られた悩みや困り事については今の自分にも通じている部分もあり、改めて自分のことも振り返るきっかけになった。特に沈黙が怖いという話は、1年前に感じていた悩みでもあった。実際のカウンセリング場面では、Cl.が考えている時間や、こちらが何と答えようか悩んでいるという時間でもあるので、怖いという感覚はないが、RPではその部分を再現することが難しい。互いに初めてということもあるので、緊張感もあったのではないかと思う。RPでそこまで再現することは難しいが、沈黙が怖いことは誰もが通る道なのではないかと思うので、はじめに体験しておくことも大切なのではないかと思う。

今年のM1とは前期は授業もかぶっていないので、なかなか接する機会がなかったが、今回のSVを通して短い時間ではあったが、M1の子と話す機会が得られてよかった。

(3) 寺田

筆者がSVを行ったケースは、配偶者を亡くし、喪失感と後悔を感じているという60代男性のCl.であった。筆者自身、他の授業等でのRPを含め、死別に関わるケース、或いは高齢者のケースは体験したことがなかった。そのため、自身の臨床経験に基づいて「アドバイスする」と言うよりは、SVeeからの情報を基に、「自分がCl.だったらどう感じているだろう?」「自分がCo.であればどのように応答するだろう?」と、Cl.とCo.それぞれの視点に自分を置きつつ、ケースの方針やCo.の応答について「共に悩み、考える」ことを意識しながら進めていった。

SVを通して印象的だったのが、SVeeがCl.との面接の中で抱えていた不安が多く語られていたことであった。例えば、初回のSVにおいては面接中「沈黙が怖かった」ということがSVeeの口から何度も語られた。SVeeはこのようなRPも含め、初めてのCo.体験であったからか、「カウンセリングとは何か」、「自分はCo.としてどのように振る舞うのが適切か」といったことを悩んでいるように見えた。それに対し、筆者はSVeeの不安に対して、受け止め、共感を示しつつも、自らの解釈を元に、「自分だったらこう思うと思う」という意見をSVeeに提示した。

しかし、自分でSVの記録を書き、振り返る中で、そのような筆者の応答に対してSVeeが受け身になり、SVee自身で考える機会を奪ってしまっているのではないかと感じた。そのため、その後のSVでは、よりSVee自身で考える、或いはSVeeが筆者に積極的に意見を伝えられるようにすることを意識して、応答の仕方を修正していった。

そうしてSVを重ねる中で、SVeeが筆者の意見や、SVの中で一緒に考えたことを面接の中で活かそうと挑戦している様子が窺えた。その中でSVee自身が手応えを感じる部分もあったようで、その点に今回のSVの意義を感じた。また、今回のSVor体験は、筆者自身にとっても、面接に臨む態度やクセ、これまでの経験を通した視野の広がりについて、改めて感じるができる機会となっていたように思う。その中で、記録を書いて自らが行ったSVを振り返るといふことの果たした役割は大きかったと感じる。

最後に、M2・教員間で行った振り返りを通して考えたこととして、3点挙げる。

1点目は、SVの主導権についてである。今回、筆者は無意識にSVor主導でSVを進めていた。具体的には、SVeeが何を語るか、どこに焦点を当てて検討を行うかについて、どの回においてもSVor側からの提案が進むことが多かった。しかしながら、他の院生によるSVでは、SVeeが

積極的にケースの内容、検討して欲しい事項について語り、SVorであるM2がそれに追従するというタイプの進め方を取っているケースもあったようだった。これについては筆者/SVeeのクセ、先輩後輩という普段の関係性、両者のSVという空間に対する意識の表れ…といった様々な視点から考察が行える部分と感じる。いずれにせよ、パラレルプロセス—SVの在り方がSVeeとCl.の面接の在り方にも影響を与えることを考慮すると、もう少し筆者はこの点について自覚的であるべきだったと感じた。

2点目は、SVの関係と日常における関係との境界の曖昧さである。今回は講座の先輩後輩という関係もある中でのSV体験だったが、筆者はその際にSV (SVorとSVee) の関係と先輩後輩の関係に明確な線引きをしていなかった様に思う。特に3回目のSVにおいては、ケースの内容から外れ、学内実習に関しての不安や研究のことなど、SVからの流れで私的な内容も話すことがあった。この点において、今回の体験はSVとしてはやや特殊なものであったと言えるだろう。

3点目は、指導的なSVの是非である。他の院生による体験談を聞く中で、筆者だけでなく他の院生からも「自分が指導的だった」という発言があった。これは決してポジティブな意味合いで出されたものではなく、指導的=悪という考えが院生の中で共通してあるように感じた。しかし、指導的なSVであることが必ずしも悪いというわけではないだろう。もちろん過度な指導によって、SVeeの思考機会、自らの創意工夫の機会を奪うことになってしまっただけではない。ただ、場合によっては一緒に考えるだけではなく、道を示すというアプローチが求められる時もあるだろう。特に、初学者の場合だと考えるための視点自体を持っていないということも考えられる。その場合は先に視点についての指導無くして一緒に考えることは不可能だろう。指導的であることと支持的、ピア的に考えることの意識的な使い分け、場面の見極めが重要であると改めて感じた。

今回、コロナ禍の影響もあり、一緒に授業を受ける機会はあるものの、そこまで深く話す機会が無かったM1と、Zoomを介して一对一のSVを行うというのは、なかなか筆者としては緊張するものであった。互いに臨床経験の浅い初学者であるということもあり、探り探りのSVとなり、十分に扱うことの出来なかった課題も多い。しかし、先述の通り、自らの臨床経験として多くの得るもの、学んだことがあり、その点において今回の体験は筆者にとって非常に意義のあるものであったと感じる。

(4) 本間

SV体験のまとめとして、最初に困難さを感じたところからまとめていく。まず、自分からどのくらい問いかけを行うか、その裁量が難しかった。SVの時間はSVを受ける側が好きのようにその時間を使うべきだと思う。なので、こちらは受ける側の求めることにできる限りこたえていくべきだと思うし、こたえていくことに専念するべきであるとも考えていた。しかし、実際にSVの体験をしてみると、問いかけられたらそれにこたえるというような受け身的な関わり方だけでは、不十分なようにも感じた。助言や他の人の意見が欲しいだけならば、もしかしたらインターネットで検索したらすぐに必要な情報が得られるのではないかと、とも思う。SVの時間は、助言をすること以外にも、1人では振り返りきれないようなことを誰かの力を借りながら、一緒に振り返っていくことができるような時間にするのも大切なのではないかと

考えるようになった。また、なぜそこについて助言が欲しいと思ったのか、ということや、どうしてこのやりとりが気になったのか、ということなどに目を向けるには、1人の力では気付けない場合があるようにも感じた。受ける側にとってSVが良い時間になるためには、ある程度はこちらからも問いかけを行う必要があるのだと、気付くことができた。

次に、相手を褒めることに難しさを感じた。SVの時間は、どうしてもカウンセリングの内容の振り返りになってしまったり、それに関しての助言や意見を述べたりすることに、時間を費やしがちであった。その場で褒めようと思ったり、良いところを探そうと意識したりしなければ、SVの時間全体が修正点探しのようにになってしまうようにも感じた。SVを行う際には、相手の良いところを探す姿勢を持ち続ける必要があるのではないかと考えた。

また、SVをしていると、上から視線な状態になりやすいように感じた。確かに、今回は先輩と後輩という上下関係はあるものの、学んできた領域や環境はそれぞれで異なっている。したがって、先輩後輩以上の上下の関係は無いようにしたいと思っていた。しかし、いざやってみると、何気ない言葉の端々にさえ、上からものを言っているようなニュアンスを自分でも感じ取ってしまう。相手に嫌な思いをさせてはいないかと、終始気になってしまった。具体的には、こちらの意見をいうとき、自然と「これは面接のときやってなかったでしょ？」というような体になってしまった。SVの時間でもカウンセリングをおこなう時と同様に、言葉は慎重に選ぶ必要があるのだと改めて感じた。

最後に、自分は結局SVを受ける側にとって、どのような存在であるべきだったのか、疑問に思った。私は心理学をずっと専攻してきたわけではなく、継続ケースをまだ持った経験もない。他のM2と比べてもSVをできるような立場にはないだろうと思っていた。今回はSV体験であったことから、私自身がカウンセリングに対する姿勢や考え方を改められる機会になったこと、またM1と親交を深められたという面であれば、SVを体験できてよかったと感じている。しかし、SVの時間がM1にとって実りのある時間になったのか問われると、自信が持てない。もっと助言や意見をたくさん言えて、適度に振り返りを促せるようなSVができていたならば、M1のためになったのではないと思う。SVが本来どのようなものであるのか、またそれと比べると今回のSV体験はどのような位置にあったものなのか、もう一度よく考えてみたいと思う。

(5) 田中

SVの中で1番難しさを感じたこととして、いかに指導の側面を強くし過ぎないかということがある。修士1年と2年で1年間の学びや臨床経験の差があり、一般論の知識量も2年の方が多い。そのため、SVeeが知らない知識や考えをSVorが押し付けてしまいがちである。その可能性を意識して、共に学び省察する関係性でSVを行っていった方が良く感じていた。

SVeeは経験が少なく、RPの中でも不安に感じている様子が見られた。また、話を聴き取ってみると、SVで何をするのかを詳しく把握しきれていないようだった。そこで、1回目のSVを始める前に、治療契約のようなやりとりを交わした。具体的には、ここで何ができるのか、SVeeはこの場においては免責された上で記録を振り返ることができること、SVeeのニーズに合わせてSVorと進めることができ、自由に時間やSVorを使ってもよいことを確認した。このやりとりは、先輩後輩などの立場や権力性を解除するために意義があったと感じる。

SVeeから相談されるのは、沈黙や欠席の扱い方、「聴く」と「訊く」ことの使い分けな

ど面接の中でうまくいかなかったと感じている点をどのように改善するべきか、というものが多かった。特にSVeeは、うまくいかなかったという印象や自身の至らなさを反芻的に語っていた。そこで、SVorが昨年度の試行カウンセリングやその他の実習で経験したことをもとに、誰にでも（特に初学者において）うまくいかなさが当然生じうることなのだとすることを伝えた。その際には、昨年度の紀要論文でのまとめ、検討や体験記での振り返りも役に立った。参照軸があったことは、SVにおいて上手くいった要因のひとつだと言えよう。さらに、SVorから、試行カウンセリングの場面全体がどのように進んでいたか、そのときCo. (SVee) が何を感じ考えていたのか、それが自身の応答やCl. にどのような影響があったと考えられるかを振り返ることに視点を移した。それによって、SVeeが次回の試行カウンセリングでのCo. としての応答について意識的に取り組むことができ、最終回ではSVee自身のCo. としてのあるべき姿を考えるきっかけとなったようである。

一方、面接の中でうまくいっている点を取り上げることも、Co. (SVee) の良さを以降の面接に活かし、伸ばしてもらうために必要だと感じ、意識して取り組んだ。短いSVの時間、逐語記録とSVeeの印象という限られた情報の中で、SVeeが取り上げたい点を尊重しながら、SVorがSVeeのCo. として良い点を見つけ、言語化して端的に伝え返すことには、難しさがあった。しかし、このような進め方は、SV関係を構築する上でも、次回面接に向けてSVeeの意欲を高める上でも意義深いものだといえるだろう。

3回という少ないSVの中でも、SVeeの面接場面での特徴や癖に気付くことができることは発見であった。SVで共に面接を振り返る中で、SVeeの持つ不安や迷いを見出し、受け止めながらどのように面接に取り組むべきかを共に考えることもできた。回数を重ねるごとに、SVeeの面接場面における関わり方の変化やそれによる面接の変化があった。それはSVorにとって喜ばしかった。SVと面接を通して、Cl.、SVee、SVorがそれぞれ成長していくことができ、その成長をSVeeもSVorも意識しながら取り組むことが重要であると気付かされた。

加えて、今回のSVで特徴的で印象に残ったこととして、SVorとSVeeが共通の背景知識として（精神）看護の観点を持っていた点が挙げられる。精神看護との違いや共通性、「ケア」と「セラピー」の違いなどについて、共に考えながら検討し、学び合うことができた。SVにおいて周辺関連領域の知識や考え方をSVorが持つておく重要性に気付かされた。今回のSVの特徴であった一方で、互いにどのような情報や知識を持っているのかを把握しておくことは、SVに限らず心理臨床一般においても重要なことであり、今回の体験はそのトレーニングの機会になったと考えられる。

IV 意義と課題の整理

ここまでSVorとなったM2の体験の整理も含めて、一連のプロセスにおいて受講者がどのような体験をし、どのような問題意識を持ったかについて示した。ここではそうした問題意識を整理し、いくつかの論点からその議論を深め、「臨床心理基礎実習」、すなわち心理臨床について学ぶ初学者がRPやSV体験をすることの意味について検討したい。またこの時、必要に応じてオンラインで実施した（実施せざるを得なかった）点についても言及しながら検討したい。

1. オンラインカウンセリングと対面カウンセリングについて（土井）

今回のRPは、1回目がZoomを使ったオンライン形式で、2回目と3回目は対面形式で実施された。そこで、Co.の体験とCl.の体験をオンラインカウンセリングと対面カウンセリングという観点から比較しながら考察する。

まず、オンラインカウンセリングについて、Co. 役の体験とCl. 役の体験の両方において話しにくかったという報告が多く見られた。具体的には、話し出すタイミングが分かりにくかったことや相槌を打つタイミングを計ることが難しかったこと、視線が合わない感覚があったことなどが挙げられた。これらは同時に2人以上の人が話すことができないことやカメラが画面の上に位置していることといった、オンライン会議システムやパソコンの特性が影響していると考えられる。今回の体験記では、このような特徴が話しにくさにつながると捉えられていたが、Cl. によっては話しやすいと感じる場合もあるように思われる。話しにくさの要因として、例えば、視線の不一致が考えられる。岸・村瀬・野嶋（2007）は、テレビ電話を用いた遠隔カウンセリングのCl. の認知的評価を、対面方式と音声方式とで比較した。その結果、カウンセリング後のインタビューにおいて、遠隔カウンセリングでの視線不一致に関して違和感があるという意見があった一方で、視線が合わないことへの肯定的な意見も見られた。これまでの研究と今回の振り返りから、Cl. の視点で考えると、オンラインカウンセリングの特徴が話しやすさにも話しにくさにもなり得ると考えられる。今後はCl. の特性や状況、ニーズなどに合わせて、どのようにオンラインカウンセリングを取り入れていくべきか検討する必要がある。

次に、対面カウンセリングについて、表情やジェスチャー、空気感、雰囲気を読み取りやすいことを複数の院生が述べている。カウンセリングにおける空気感について、豊原（2021）は対面カウンセリングとオンラインカウンセリングを比較し、オンラインカウンセリングにおいて感覚的な情報が十分得られないことは、コミュニケーションにおけるもどかしさや不全感、アセスメントの難しさとして体験されることも少なくないのではないかと指摘している。今回のRPにおいても、オンラインで実施した際には細かな感覚的な情報のやり取りが難しく、コミュニケーションに不全感があったのに対して、対面で実施した際には視覚的・聴覚的な情報に加えて空気感や雰囲気を感じ取ることができ、そのことが話しやすさにつながったと推察できる。一方で、Cl. 役の体験の中で、オンラインで会っていたCo. と初めて対面で会うときに緊張したりCo. 像が揺らいだりしたという報告があった。今後はオンラインカウンセリングから対面カウンセリングに切り替えた場合も含めて、継続的なカウンセリングにおけるオンラインカウンセリング利用の効果を検討する必要がある。

最後に、カウンセリングのトレーニングとして、対面カウンセリングとオンラインカウンセリングを体験することについて考察する。振り返りの中で、Zoomでレコーディングすると画面も録画されるため、会話とノンバーバルな部分をあとから確認できるという点がオンラインカウンセリングのメリットとして挙げられていた。また、対面カウンセリングとオンラインカウンセリングの両方を体験することで、上に示したような対面カウンセリングの利点や、非言語情報の重要性に気づくことができるのではないだろうか。今回は感染症の流行状況により、対面形式とオンライン形式の両方を体験したが、感染症収束後もカウンセリングトレーニングにおける両形式の併用が期待できる。

2. ロールプレイを通じてクライアント役を体験する意義 ―試行カウンセリングでの体験と比較して― (辻脇)

今年度の「臨床心理基礎実習」ではRPを用いてカウンセリング実習を実施した。具体的には、担当教員が作成した架空事例を基にそれぞれの学生がCo. 役とCl. 役を演じ、カウンセリングを行った。一方で前年度の同科目では、実習形式として試行カウンセリングを採用していた(井出他, 2021)。RPと試行カウンセリングの違いのひとつにはCl. 役の語りの設定が挙げられる。RPのCl. 役は架空事例のCl. になりきり、既に設定されている相談内容を基にカウンセリングで語るようになるが、試行カウンセリングのCl. 役は現実の自分について話すことが求められる。今年度と前年度の学生が述べたCl. 役の体験を比較すると、その設定の違いから学びや気づきの特徴にも違いがあることが分かった。そこでRPと試行カウンセリングでの体験内容を比較しながら、RPを通じてCl. 役を体験する意義について考察を行う。

RP後の振り返りでは、複数の学生からCl. 役を通して「悩みを聞いてもらう安心感」と「語ることへの抵抗感」への気づきが報告されていた。「悩みを聞いてもらう安心感」については「自分の話をCo. が嫌な顔をせず傾聴してくれたため、自分の話をしっかり聞いてもらえることに安心感を抱いた」「Co. にゆっくり聞いてもらっているだけでほっとする感覚があった」という報告があった。実際のCl. の中には、身近に相談できる人がいない、あるいは相談してもうまくいかず、カウンセリングを受けるまで一人で悩みを抱えてきた人もいるため(野村, 2015)、その場合Co. に自分の悩みをじっくり聞いてもらえるだけで安心できると想像できる。RPでは深刻な問題を抱えるCl. 役を演じることになるため、Co. に話を聞いてもらうことへの安心をしみじみと感ずることができると考えられる。一方で前年度の試行カウンセリングでは、Cl. 役を通して悩みを聞いてもらうことへの安心感を抱いたという報告は見られなかった。その理由は、前年度の試行カウンセリングではあまり深刻にならないような自分の日常についてCo. 役に話すことが求められており、深刻な悩みを聞いてもらうという体験が実現しづらかったためだと考えられる。

また「語ることへの抵抗感」については、RPを受けた複数の学生から「現実の自分が抱えている問題ではないのにCo. 役に話しづらいと思った」「自分の話をCo. 役に受け止めてもらえるか、否定せずにきちんと聞いてもらえるかどうか不安だった」など、悩みを語る際に抵抗感を抱いたという報告がされていた。Co. が自分の話をきちんと聞いてくれるか、自分の問題を口に出して表現することでさらに気分が落ち込んでしまうのではないかという不安は実際のCl. も抱きやすいと考えられる。野村(2015)は、心理的な専門機関に来談する前のCl. の中には、悩みを解決したいが専門機関に来談して解決になるのか疑問を抱き、そのような専門機関への来談に対する葛藤を打ち破るまでに長期間苦悩している人もいと述べている。彼らはこのプロセスを経て、やっとの思いでカウンセリングを受けに来ているため、カウンセリングに対する期待がある一方、語ることへの不安を感じていることも想像できる。そのような不安から、初期の面談で「語ることへの抵抗感」を感じるCl. もいると考えられる。RPでは架空事例のCl. になりきることで実際のCl. が感じるであろう「語ることへの抵抗感」をより体験的に学ぶことができると言える。一方で前年度に試行カウンセリングを体験した学生からも「語ることへの抵抗感」について報告されていた。しかし、前年度はほとんどの授業がオンライン開講で学生同士の交流が密ではなかったという状況もあり、Cl. 役を体験した学生からは「オンライ

ンでしかコミュニケーションとったことがない相手 (Co. 役) に自分のことを話すのは若干抵抗があった」「まだカウンセリングというもの自体あまりわかっていない中で、そもそも何の話をしたらいいのかわからなかったことと、相手はCo. でもあり同級生でもあったので、相手と今後も関係が続くことを考えると語りにくさを感じた」という報告が見られた。これらの抵抗感は、Cl. 役とCo. 役の間に治療関係と同級生という多重関係があったことで、Cl. 役がCo. 役との今後の関係を意識してしまい、自分自身のことを語りづらかったというものだと考えられる。このようにRPと試行カウンセリングの両方で「語ることへの抵抗感」が報告されていたが、それらの質は異なっていると言える。

以上のことからRPを通じてCl. 役を体験することは、実際のカウンセリング場面でCl. が経験する「悩みを聞いてもらう安心感」や「語ることへの抵抗感」への気づきにつながると考えられる。これは架空のCl. を演じるというRPの特徴があるからこそ得られる学びであると考えられる。今回のRPではできる限り忠実に役になりきるために、それぞれの学生は事前に架空事例を読んでCl. 像を想像し、どのような問題を抱えているのか、その問題に対してどのような感情を抱いてきたのかを捉えた上でカウンセリングを受けた。しかし、それでも学生から「Cl. の問題が未知のものだと想像がしにくく、役になりきれない気がした」という報告があった。そのため、Cl. 役の学生はCo. 役以外の学生と一緒にCl. 像について想像を膨らませたり、想像しづらい部分は教員に相談したりするなどの取り組みをすることで、実際のCl. に近い体験することができると思う。

3. カウンセリングの初学者が抱える不安について (上倉)

初めてのRPを通して、カウンセリングの初学者であるM1の体験記からはRPを行う上での戸惑いや不安が語られた。割澤 (2016) は、初学者の学習プロセスの最初の段階として「何をどのように学べば良いか分からず混沌としている状態」として「捉えどころの分からなさ」の段階があると述べており、上倉・齊藤・佐藤・野村・入軽井 (2016) も初学者の心理臨床家としての成長モデルの最初の段階として「陪席・面接への不安を感じ、Cl. への過度な注目に対処する時期」であるとしており、心理臨床家を目指す初学者にとって最初の段階として不安が語られることは妥当な反応であると言える。Aladag, Yaka, & Koc (2014) によれば、初学者はトレーニングを受けた当初は強い不安や力不足を感じていたが、スキルトレーニングの過程で専門家として認められることで有能なCo. になれるという自信がついているという。以下、M1の体験記で語られた不安とその不安をどのように乗り越えていくことが可能なのかということについて述べる。

まず、「Cl. にどのように声をかけるのか、またどのように質問したら良いか、どのように話を進めていけば良いか、などが心配だった」「どのようなことから話し始めたら良いか戸惑った」「自分の意見を話しても良いのか心配」といった不安が表出された。RPを行った当時はカウンセリングの基礎について学び始めたばかりであり、それも理論的な内容が多かったため、具体的なケースについて考えたときにCo. としてどのようにCl. と接することがCl. にとって良い影響を与えるのか、という点で関わり方に難しさがあったのではないかと推測される。また、親や友人、同僚といった役割において、人は絶えず、他者が意思決定し、問題を解決し、人間関係を改善するのを助けようとしている (Ronnestad & Skovholt, 2003) が、心理職としての役

割はそれとは異なっていて、親や友人との関係におけるスキルでは適合しないことが知識として理解できていても、実践に至ることは難しいということが考えられる。心理職の役割を理解した上で、「どのように話し始めたら良いか」という疑問や、相槌や返す言葉のレパトリーといった、カウンセリングのスキルについては、大学院の講義内で大枠に関する指導を行うことで、初学者本人が得た知識を応用していくことが可能となる。割澤（2016）によれば、初学者の学習プロセスの進行を支えるものとして「知識や助言に依拠する学び」と「自身の感覚や判断に依拠する学び」があるという。例えば、RPを行う前にひとつの例としてカウンセリングの始め方や言葉のレパトリーについてデモンストレーションを行うことは効果的なのではないかと考えられる。心理臨床家として経験豊富な複数の教員をモデルとして自己のスキルを向上させることができるのは養成校にいる大学院生の特権であると言える。カウンセリングスキルが向上することで、経験不足からの不安は軽減されるのではないだろうか。

次に、「自分の言動がCl.を不快な気分させていないか常に不安になってしまい、本人の話や気持ちを集中して捉えることができなかった」「聞きたい内容があっても傷つけてしまったり負担になったりしないかどうか気がなり、なかなか聞き出せないところに難しさを感じた」という、自分自身の言動がCl.を傷つけてしまわないかどうかという不安も語られた。また、「Cl.の気持ちや考えに焦点をあてて話を聞くことができず、Cl.のありのままの心理状態を理解することができていなかった」という記述があった。RP中のCl.に対する関わり方の不安から、自分自身の言動に意識が向いてしまったことが予想され、これは、上倉・齊藤・佐藤・野村・入軽井（2016）が述べる「第I期：陪席・面接への不安を感じ、Cl.への過度な注目に対処する時期」と一致すると考えられる。カウンセリングに限らず、言葉は相手が受け取って初めて意味が生まれるものである。そして、相手に一度届いた言葉は取り消すことができないからこそ、Cl.を傷つけないように発言しようとする姿勢は妥当な反応であると言える。一方で、RP後の振り返りで得た気づきの中に「Cl.に対してうまく応答することができなかったと感じても、自分の発言に対するCl.の反応をしっかり見ることで自分の発言に対してどう感じたのかを確認でき、フォローすることも可能となる」という記述があった。Cl.に届いた言葉は取り消すことができないが、あとからリカバーできる可能性もあるということ、経験を通して学んでいくことでこのような不安は軽減されるのではないだろうか。また、「Cl.の傷に触れてしまっているのか」「防衛を崩してしまっているのか」という不安は、自分の中の「傷」や「防衛」の問題と重なって体験されており、無意識的に自分の問題として感じられているために、触れることに過度のためらいを感じていると考えられる場合もある（山口・高澤・藤居, 2017）が、そのような自分由来の不安なのかCl.由来のものなのかの区別が難しいという点もある。さらに、自分由来の不安でも、Co.としてCl.と向き合うために必要な専門職としての緊張感を持つために必要な不安と、経験や知識が不足しているが故の不安は異なるのではないだろうか。自分が抱えている不安が何であるかを実体化し、俯瞰して見られるようになることが初学者の成長過程に必要なことだと考えられる。そのためにも、今回のRP後に行った文字起こしを通して過去の自分を振り返ることやSVを受けることは必要なことであると言える。心理臨床家としての成長のために、自己の不安と向き合うこと、そしてそれをコントロールしていくことが重要であると考えられる。

4. カウンセリング中に生じた沈黙の扱い方について（本田）

「臨床心理基礎実習」でカウンセリングのRPを行ったところ、全員が「沈黙が苦しい」「沈黙をどう扱うか」という点で困っていた。沈黙が流れたのは自分が何か変なことを言ってしまったからかもしれない、Co.側がうまく繋がなければならないと焦りを感じたという声が多くあがった。対面カウンセリングよりも表情や空気感を感じ取りにくいオンラインカウンセリングの方が、沈黙は生まれやすく扱いが難しいという意見も多かった。初回のRPではほとんどの院生が沈黙に対してマイナスの印象を抱いていたが、回数を重ねることでCl.は話す内容をまとめている、もしくは内省しているかもしれないと思えるようになり少し余裕をもって待てるようになったという体験があった。これは、院生がCl.役とCo.役の両方を体験することで、マイナスの意味ではない沈黙（言いたいことがまとまらない、話す内容を考えている）を実際に経験したからではないかと考えられる。しかし、RPの相手が面識のある院生どうしであったため、相手の性格が分かっただけでの沈黙の解釈であることを考慮する必要もある。また、RPは架空の事例を演じたものであり自分の経験や主訴ではないため、Cl.役が話をどう展開していけばいいか分からずに沈黙になってしまったケースも存在した。

高山（2017）によると、いろいろ話したのに「つらいですね」の一言でまとめられてしまい、つらいことは間違っていないのでCl.も「そうですね」としか返せず沈黙になってしまったという報告がある。このことから、Co.の返答が沈黙を生むきっかけになる場合もあるといえる。Co.がCl.にとってぴたっとくる言葉を見つけてくれると伝わった感じがする（高山，2017）とあったので、Cl.がじっくり来ていない様子であればその言葉を一緒に探すことも有効であるといえる。また、共感的な相槌をうっていたのにCl.が話さなくなってしまうときには、Co.が話していた内容に質問をしてCl.の気持ちをもっと引き出して話を深めていくと、カウンセリングが進展しない沈黙をなくすることができるかもしれない。

以上のことから、沈黙には待っておいた方がよいものと、Co.から次の言葉を促した方がよいものがあるということが分かった。それを判断するためには、普段からCl.の話し方や話すペース、表情をよく観察しておくのが最も大切であると考えられる。そうすることで、Cl.が今は考えている最中なのか、それともCo.の解釈が少し異なりもやもやしているのかを判断しやすくなるといえる。また、経験を積むことやカウンセリングの体験記を読むことも、返答のレポーターを増やすことになるだろう。

実際に相談室で担当しているケースでも時々沈黙は発生する。そうした沈黙は主に会話が一区切りついたところで少しの間発生することが多い。RPで経験しているため沈黙が発生しても大丈夫という考えが頭の中にあり、そこまで焦ることはなくなったが、やはり落ち着かない気持ちは出てくる。また、面接時間が30分と短いため沈黙は多くない方がいいのではと考えてしまい、早めに次の話題に移ることが多い。たくさん話すことも悪くはないといえるが、Cl.が質問に答えていくような受け身のパターンになりつつあるので、沈黙を活用してCl.が自発的に話し始めるのを待つというのも有効になるかもしれない。今後は、Cl.の反応や表情を注意深く観察し、必要な沈黙かどうかを判断して、時には沈黙を活用しながらカウンセリングを進展させられるように経験を積んでいきたい。

5. 心理的な支えとしてのスーパービジョンと、スーパーバイザーの選定について (朴)

今回RPを用いた演習では、それぞれ仮想事例のCo. 役とCl. 役を担当しRPを行った。RPでCo. 役を担当した時には記録作成と共にSVを受けた。全てのRPが終わった後に行った振り返りでは、「受講者たちにとってSVorである先輩たちとのSVが心理的な支えになった」という意見が出た。そこでこの本文では心理的な支えとしてのSVについて考察した上で、今後SVを行う時どのような部分を考慮しSVorを選べばよいかについて述べる。

まず本実習では、「普段から関わりのある先輩になら比較的気軽に質問することができ、自分の中の疑問を疑問のまま終わらせることなく消化することができた」「より客観的にカウンセリングを捉えることができ、Co. としてどのような観点で支援を行うべきかが明確になった」「Cl. との関わりの中で感じた不安や戸惑いを、SVorと一緒になぜそのような感情が起こったのかなどと検討することで、自分の中で起きていた感情の揺れを明確に捉えることができる」「SVで話を聞いてもらいアドバイスをももらうことで、自分の課題を整理することができ、不安を軽減させた状態で次のRPに臨むことができた」「全般的に自分のカウンセリングの内容などについてSVorの先輩から肯定的な意見をももらったことで少しずつ自信を持つようになった」といった心理的に支えになった意見が見られた。井出他 (2015) は大学院におけるSVでのよかった体験について、精神的に支えられた点としては「ケースを行うにあたり安心してもらえた」「心理的にささえてもらった」「自信をもつことができた」などと述べている。またそれ以外にもよかった点として「客観的な視点・意見をもらえた」「自分では見えていなかった点に気づいた」「自分の特徴 (特徴・感性・やっていること) をポジティブに受けとめてもらえた」などと述べている。先に述べたように、心理的には不安を消化し、安心感をもたらえること、客観的な意見をもたらえること、アドバイスをもたらえることなどがSVのポジティブな面だと言える。初めてRPを用いた演習をする大学院生はカウンセリングの経験があまりなく、Co. としての経験も少ない。そのため、RPでCo. 役とCl. 役を行うことが難しいと感じる場合がある。その時、SVは不安を抱えている大学院生にとっては心理的に支えとなり、心理臨床の勉強の場にもなる。実際本実習でSVは受講者たちの悩みを解決し、心理的に安心感を与え、次のRPを進めることに役に立った。このようなポジティブな面から、SVは単にSVorがSVorにカウンセリングに対する専門的な指導・意見をもたらえる教育的な場であるだけでなく、心理的に安心感をもたらえる場にもなる面があると言える。

しかし、SVを受けることには、心理的な支えやよかった点だけがあるとは言えない。箕浦他 (2014) は、大学院におけるSVでのよくなかった体験について、「教えてほしいことをあまり教えてもらえなかった」「SVorの態度がいやだった」「SVorに依存しすぎた」「SVorとかみ合わなかった」「SVを受けることで心理的なマイナスが生じた」などと述べている。このように、SVがSVorにとってネガティブに作用する可能性がありうる。本実習では、お互いに知り合いである先輩と後輩がSVorとSVorになりSVを行ったことについて、ネガティブな意見は出ていなかった。このことから今回の演習でのSVには先に述べたようなよくなかった点はなかったと考えられる。しかし、知り合いだからこそ、SVを行う際によくない点を念頭におく必要がある。距離が近い場合、SVorに依存しすぎる可能性がありうるし、客観的な意見をもたらえない場合があるためである。

それではSVを行う時どのような部分を考慮し、SVorを選べばよいかだろうか。まず、考える

べき点は、SVeeとSVorの相性だと思う。たとえ優秀なSVorだとしても、SVeeには厳しいと感じたり、欲しいアドバイスももらえないと、SVeeにとってはよいSVorだと言えない。逆に、親切ではないSVorだとしても、心理的な支えになり、また客観的な意見をもらえると、SVeeには力になるSVorだと言える。また距離が近いSVorと遠くないSVorのどちらを選ぶのかも考慮する必要がある。距離が近いと客観性に欠ける可能性もあり、問題点や改善する部分に気づかない可能性もありうる。一方、距離が遠くないとより客観的かつ新しい視点の意見をもらえることができると思われる。SVeeが望むSVor像はそれぞれ異なる。よいSVorとよくないSVorは決められていない。一番重要なのは、SVorを選ぶ際に自分がどの部分を重視してSVを行いたいのか考えるべきだと思う。

V まとめ

本報告ではCOVID-19感染拡大下で開講された「臨床心理基礎実習」の取り組みについて、RPにおけるCo.、Cl.体験、あるいはSVにおけるSVor、SVee体験を中心に振り返り、臨床心理学初学者にとっての意義と課題について検討した。授業者としてはオンラインでの開講となることも見越しながらも、心理臨床家の育成に必要な体験的な学びの機会を準備する必要がある中での取り組みであった。一方、受講者である大学院生にとっては大学院入学後、間もない時期に、その学びの入口として設定される授業であり、教員との関係性や受講者同士の関係性が十分に形成されていない中で、オンラインでの体験を余儀なくされる面があった。結果的に本年度はRPの多くは対面で実施できたものの、RPを実施する際にも密集を避けるために個別に相談室に入り実施するという形を採用せざるを得なかった。こうした多くの制約の中で体験的な学びの機会を準備するにあたり、昨年度はRPではなく試行カウンセリングを用いた。しかし、大学院生同士という狭い関係の中で、オンラインで取り組まなければならないことなどから、受講者からは多くのやりにくさが報告された。そこで、今年度はCl.として自分語り求められる試行カウンセリングではなく、あらかじめ設定が準備されたRPを採用した。院生の体験記を見ると、それでもオンラインゆえのやりにくさについての記述がみられたが、試行カウンセリングに比べると幾分、肯定的な体験が多いようにも思われた。加えて、体験的な学びの機会という面では、特に面接に臨む際の不安や面接中の沈黙の扱いを始めとするやり取りに関する不安など、やはりRPであるからこそ体験することができたという側面にも言及が見られた。

加えて、今回はM2の実習代替措置としてSVの時間もこうした取り組みの一部に取り入れる必要が生じた。本来であれば自分がこの人にSVを受けたいという人に依頼して行われる性質のものだが、今回は授業者が便宜的にペアに振り分けてSVの体験をしてもらうことになった。体験記にも表されているように、SVorとなったM2のSVに対する意識や考え方には差異が見られ、今後もこのような取り組みを継続していく場合には、授業者としてはどのようにSVのペアを作るかについての検討、あるいは院生同士のSV体験における留意点の整理や院生への教示内容についての検討が必要である。

最後に、第1回目のRPはオンラインで実施し、それ以降のRPは対面で実施されたということがどのような意味を持ったかについて振り返っておきたい。感染拡大状況、BCPレベルによってやむなくオンラインで実施をした第1回目のRPであったが、結果的に第2回以降のRPが対面で実施できたことによって、M1は心理臨床が対面で行われることの意味を体験的に学んでい

たように見える。感染拡大前、心理臨床のトレーニングは対面で行うことが自明のことであった時には自然には学び得なかったことかもしれない。もちろん本稿の中にあるようにオンラインのメリットにも目を向ける必要があるが、感染拡大による制限は心理臨床家を養成する中で「対面」することの意味や意義を改めて考えさせてくれる機会でもあった。

引用文献

- Aladag, M., Yaka, E., & Koc, I. (2014) Opinions of Counselor candidates regarding Counseling skills training. *Educational Sciences: Theory & Practice*, 14, 879-886.
- 井出尚子・田淵尚子・箕浦亜子・上村恭子・小海富美代・須佐祐子 (2015) 心理臨床家の専門家としての発達に関する研究(3) ～大学院における心理臨床教育としてのスーパーヴィジョンに求められること：スーパーヴィジョンでのよかった体験の質的分析より～, 明星大学心理相談センター研究紀要, 9, 1-13.
- 井出智博 (2013) 児童養護施設Competent Therapistは“生活の場”をどう捉えているか, 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇) 63, 43-54.
- 井出智博・大西春香・高橋茉悠・田中佑典・寺田拓晃・本間慧子 (2021) 「臨床心理基礎実習」におけるトライアル・カウンセリングの意義と課題：COVID-19感染拡大に伴うオンライン形式での実施を通して, 臨床心理発達相談室紀要, 4, 75-94.
- 上倉安代・齊藤翔悟・佐藤真理奈・野村規雄・入軽井悦子 (2016) 心理面接における初学者の不安への対処と乗り越え方および成長一複線径路・等至性モデル(TEM)による分析一, 立正大学臨床心理学研究, 14, 41-54.
- 岸俊行・村瀬勝信・野嶋栄一郎 (2007) 遠隔カウンセリングにおける認知的評価の検討, 日本教育工学論文誌, 30(4), 375-385.
- 箕浦亜子・田淵尚子・井出尚子・上村恭子・小海富美代・須佐祐子 (2014) 心理臨床家の専門家としての発達に関する研究(2) ～大学院における心理臨床教育としてのスーパーヴィジョンに求められること：スーパーヴィジョンでのよくなかった体験の質的分析より～, 明星大学心理相談センター研究紀要, 8, 13-26.
- 野島一彦 (2014) 臨床心理士養成大学院におけるスーパーヴィジョンのあり方, 跡見学園女子大学文学部臨床心理学科紀要, 2, 1-7.
- 野村朋子 (2015) 心理的な専門機関への援助要請体験：クライアントへのインタビュー調査より, お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 17, 51-63.
- Ronnestad, M. H., & Skovholt, T. M. (2003) The journey of the Counselor and therapist: research findings and perspectives on professional development. *Journal of Career Development*, 30(1), 5-44.
- 高山由貴 (2017) クライアントの主観的体験から見た心理面接のプロセス：面接内と面接間の双方に注目して, 東京大学博士論文要旨 (<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/shimoyama/05thesis/2017-02takayama.html> : 2022.1.20閲覧)
- 豊原響子 (2021) 遠隔相談と身体性, 甲南大学学生相談室紀要, 28, 76-87.
- 割澤靖子 (2016) 臨床心理士指定大学院における学生の学習プロセスの個人差に関する研究. *教育心理学研究*, 64, 41-58.

山口昂一・高澤知子・藤居尚子 (2017) 初学者の経験から考える心理療法の導入について(3)
—初期不安, 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 20, 75-86.

Abstract

In this case report, significances and issues of role-play (RP) and supervision (SV) which conducted between different grade levels in “Basic Practice of Clinical Psychology” were discussed. This “Basic Practice of Clinical Psychology” was one of the introductory subjects of clinical psychologist training program for first year master’s students (M1) in graduate school. The graduate students as novice learn the rudiments of psychotherapy through this subject, then they start on and off campus clinical trainings. But because of the infection spread of COVID-19, second year master’s students (M2) had been unable to join those trainings. Therefore, we had had to prepare the alternative training for them in this year. As result, the SV program which M2 is the supervisor and M1 is the supervisee was conducted additional. We discussed about the significances and issues of RP and SV that were partly done online, based on experience of the participants.